

今年は、町内会の班長を務めている。何年かに一度まわってくることになっている。その何年かに一度のサイクルが短くなっている。町内会を脱退する家庭が増えているためである。

現在住んでいるところに引っ越して約20年になる。以前は、我が家がお世話になっている第〇班は、10軒以上はあった。それが、今年は7軒である。20年で半数に減っている。家はある。人も住んでいる。町内会に入らないのである。

当たり前だと思ってきたことが、当たり前ではなくなってきた。町内会に入るのは当たり前という時代は終わったようである。町内会に入っているメリットがない。年会費をとられるが、何に使われているのかわからない。役員をやりたくないなどが、入らなくなってきた理由だろうか。

この現象は、町内会に限ったことではない。様々な組織において加入率の低下が問題になることがある。以前は、加入するのが当たり前だと思われてきた組織でも、その大前提が崩れている。もはや今までのやり方では組織を運営することが難しくなっている。組織自体が変わるときなのかもしれない。変革の時期である。

ところが、日本人は変わること、変えることに抵抗感をもっている人たちである。よほどのことがないと変わろうとはしない。確かに、変えないほうが楽ではある。前年度踏襲で、今まで通りにやっていくほうが運営はしやすいだろう。

加入率がどんどん下がっていけば、運営自体も難しいが、役員を決めるのも難しくなる。町内会がいい例である。加入率が下がる。役員がすぐにまわってくる。大変なことはやりたくない。だから町内会を抜ける。やめても特段支障はない。市政だよりは、その辺でも手に入る。

我が家では、前回の班長のときは、家人がその役目を担ってくれた。ちょうどというか生憎、私が単身赴任中だった。話を聞いているだけでも何やら大変そうだった。班長経験者の家人は、我が家のまわりのお宅のことをわかっている。それに対して、私はというと、ほとんどわからない状態だった。

そんな私が、3年前に美化部長として町内会にデビューした。まずは、近くの公園の清掃活動に参加した。誰もわからない。知っている人がいない。話したことがある人がいない。居心地がよくない。これが現実である。誰がどの家の方なのかかわからない。それでも、美化部長として挨拶をした。なんだか、教員っぽくて自分でも嫌だった。町内会の会合にも参加した。ここでも、知っている方はほとんどいない。町内会長さんが、笑顔で挨拶をしてくれる。うれしい。ほっとする。

今年は班長なので、一軒一軒お宅をまわることがある。自然と会話が生まれる。顔見知りになる。すると、お会いしても、今までの挨拶とは違い、親しみを感じながら挨拶をするようになる。町内会長さんとは、何度もやりとりをするので、いろいろな話をするようになる。少しずつだが、ようやく地域のことがわかってきた。

家人の命により、班長をやっていないならば、何十年も住んでいながら、地域のことが全くわからない人間になっていたことだろう。正直、集金など大変だと思うことはあるが、これも地域で生きていくためには必要なことと理解して取り組んでいる。

とはいえ、次は何年後に役員がまわってくるのかとローテーション表を確かめてしまうこともある。一番の心配は、我が班が7軒からさらに減ってしまうのかどうかである。そうなると、他の班への合併吸収となるだろう。それはそれで一抹の寂しさはある。

加入率の低下が教えてくれるものには、様々な要素がある。手をこまねいていても仕方がない。変革の時期には変わるしかない。班長をやってわかったことがある。近所にどんな方が住んでいるのかがわかると安心できるということである。安心は何事にも代えがたいものである。